論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1272 号	氏名	千 葉 一 平
論文審査担当者	主 査　沢 村 達 也 副 査　関 島 良 樹・香 山 瑞 恵・牧 迫 飛 雄 馬		

（論文審査の結果の要旨）

サルコペニアを含む骨格筋の状態悪化（運動機能低下および筋量の低下）は生活障害および要介護の危険因子である。要介護の予防には一般的に中高強以上の身体活動が推奨されており、サルコペニアの状態であっても中強度以上の身体活動が関連するか、より低い強度の身体活動であっても関連が見られるか縦断観察研究にて検討した。

対象者は自立した生活が可能な地域在住高齢者とした。ベースライン調査として運動機能（歩行速度および握力）と骨格筋量（生体電気インピーダンス法）を測定し対象者を正常群（筋量正常かつ運動機能正常）、筋量低下群（筋量低下かつ運動機能正常）、運動機能低下群（筋量正常かつ運動機能低下）、サルコペニア群（筋量低下かつ運動機能低下）に分類した。身体活動量はベースライン調査後 14 日間、身体活動量計を用いて中高強度および低強度身体活動時間を測定した。行政から得た介護保険認定情報よりベースライン調査から 5 年間の新規要介護発生を観察し、新たに要支援または要介護認定があった場合を新規要介護認定発生とした。

その結果、千葉は次のような結論を得た。

1. 正常群と比較して、運動機能低下群、サルコペニア群では有意に新規要介護発生リスクが高かった。
2. 正常群および運動機能低下群では中高強度身体活動が多いと新規要介護発生リスクが有意に低下し、筋量低下群およびサルコペニア群では有意な関連は見られなかった。
3. サルコペニア群では低強度身体活動時間が多いと新規要介護発生リスクが有意に低下し、正常群、筋量低下群および運動機能低下群では有意な関連は見られなかった。

これらの結果より、正常または運動機能低下のみ呈する場合には中強度以上の活動が要介護発生リスク低下と関連し、筋量低下と運動機能低下を合併したサルコペニアの状態に至ると低強度の活動であっても要介護発生と関連する事が示された。骨格筋量が保たれている場合には中強度以上の活動が推奨される一方、要介護リスクの高いサルコペニアの状態にある場合には低い強度であっても身体活動を増やし、不活動を減らしていく事が重要である可能性を示唆している。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。